

# 4月20日(火)開学記念行事

## 第1部 運動会で大ブレイク!!

学生が企画・運営するマッスルコンペへ大集合(新企画)

12時・県大グランドへ集合～ 15時30分  
(雨天時は体育館)

綱引き、障害物競走、騎馬戦、リレーなどの定番運動会  
参加賞有、第3部の交流会無料入場券をもらう資格をゲット



## 第2部 パネルディスカッションで県大を考える!

「県大と地域貢献」をテーマに  
ディスカッション

16時20分～17時50分 小講堂

例年参加した学生には大好評!!

第3部交流会の学生無料入場券配布



(昨年の様子)

## 第3部 飲んで食べて語り合おう!

学生と教職員の交流会

18時～19時45分 学生ホール食堂

学長、教職員と学生による交流会、アトラクション  
など

会費 教職員2,000円(前売り券を販売)

学生 500円(当日、会場で徴収)

第1部、2部に参加した学生は無料入場券が  
もらえます。



(昨年の様子)

(開学記念行事実行委員会)

### 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎!

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル、その他  
寄稿を積極的にお寄せ下さい。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ(管理棟2階)法月あてにお願いします。

E mail: kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集 静岡県立大学広報委員会 TEL 054-264-5103

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>

静岡県立大学 2003 US フォーラム



# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS

### CONTENTS

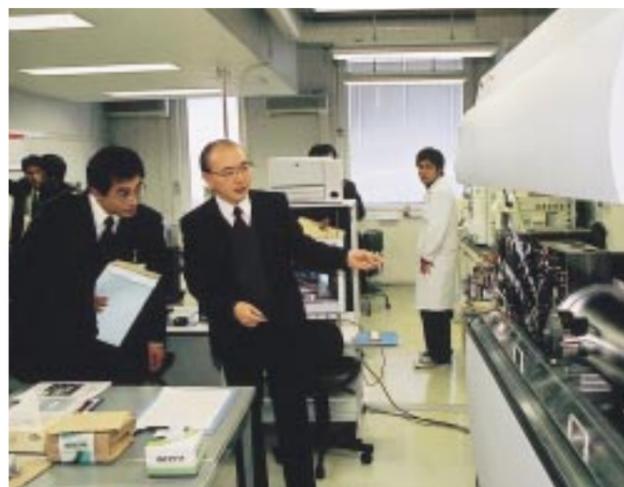
産学官民連携を考える集いを開催.....	1	受賞.....	13
静岡がんセンターと連携大学院協定を締結.....	2	教員の人事.....	13
2003USフォーラムを開催.....	3	院生のメッセージ.....	14
第13回日本メイラード反応研究会.....	6	研究室・ゼミ紹介.....	15
看護学部動き.....	7	国際交流提携大学から教員・学生が来学.....	17
環境科学研究所動き.....	9	谷田風土記.....	18
日本学術会議から感謝状.....	10	アリゾナ大学教員特別講義.....	18
骨密度測定.....	11	開学記念行事案内.....	19
地域経済研究センター設置について.....	12	原稿募集・企画.....	19
薬学部退官教員最終講義.....	13		

## “産学官民”連携を考える集いが開催される

産学連携推進委員会委員長 木苗 直秀

本学においては従来より「産学官連携」を社会貢献の大きな柱の1つとして位置付け、取り組んできた。さらに今年度より専任のコーディネーター（小國伊太郎本学名誉教授、鈴木次郎前株式会社興人常務取締役）と事務担当が配置されたことから、広く企業関係者や県民の協力を頂き、より一層の推進を図るため、本年1月26日（月）に「静岡県立大学の“産学官民”連携を考える集い」を本学で開催した。

当日は193社（242名）の方々に、午後1時30分から午後3時15分まで、薬学部棟、食品栄養科学部棟、環境科学研究所棟などの各研究室を自由に訪問して頂き、教員から研究内容について説明があった。



次いで、大講堂で表題の集いが午後3時30分より始まり、500名余りが参加した。先ず、廣部雅昭学長が「来学に対する感謝」のあいさつをし、次いで鈴木雅近副知事より「静岡県立大学の産学官民連携に期待するもの」と題してお言葉を頂いた。また、石田稔静岡県商工会議所連合会理事より「本学への積極的な協力」について、渡辺修治静岡大学イノベーション共同研究センター静岡分室長より「産学連携における本学との協調」等のごあいさつを頂いた。次いで、私が本学産学連携推進委員長として「静岡県立大学の産学官民連携」に対する取り組みの現状と今後のあり方について説明を行った。さらに講演会では、花王株式会社生物科学研究所の時光一郎博士が「ヘルシア緑茶の開発」と題して基礎研究から発売に至るまでの経過と営業戦略について報告された。



場所を学生ホールに移して午後6時30分より石川嘉延県知事のごあいさつ「県立大学の産学官民連携のさらなる推進を」との激励のお言葉のあと、谷和実県商工労働部長の「県大と県民の産学連携に乾杯」との御発声により交流会が始まった。



各企業、静岡県、市町村関係者、本学教員、学生などおよそ300名が参加し、アルコールを口にしながらか刺交換を含め積極的に情報交換する姿があちらこちらにみられた。本学マンドリン部には前期試験の直前にもかかわらず美しい音色を聞かせて頂いて大変感謝している。午後7時30分にすべての行事が無事終了した。

大学は「知を創る研究の場」、「知を伝える教育の場」であり、さらに「知の活用の道を開く社会貢献の場」でもある。本学の産学官民連携がより一層進展するため、静岡県、企業関係者、本学教員の益々の御理解と御協力を切にお願いしたい。

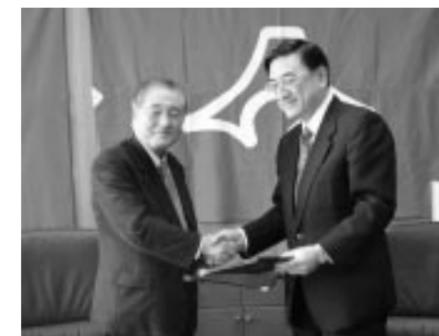


## 静岡がんセンターと連携大学院協定を締結

本学と県立静岡がんセンターは、3月16日、連携大学院の協定書署名式を同センターで行った。廣部雅昭学長と山口建静岡がんセンター総長が協定書を交わし、協力体制を確認した。平成16年度には本学看護学研究科の大学院生を静岡がんセンターに派遣し、最先端の知識、技術を学ぶこととなっている。

この他、同様の連携大学院協定により、薬学研究科では平成15年度から県立総合病院との協定に基づき5名の大学院生が県立総合病院で指導教育を受けている。また、生活健康科学研究科でも平

成15年度から県商工労働部との協定に基づき静岡、沼津各工業技術センターでそれぞれ大学院生各1名が指導教育を受けている。両研究科とも平成16年度においても同様に指導教育を受ける予定となっている。



# 2003USフォーラムを振り返って

USフォーラム実行委員長 野口 博司

2003US (University of Shizuoka) フォーラムが3月2～4日にかけて開催されました。本学創立15周年記念事業の一環として、学長特別研究費採択課題及び後藤研究費受領研究について、第1回学術フォーラム( )の形で平成13年10月にその成果報告会が開催されました。学長主導で実施された「評価」の概念の導入は学内外から高く評価されており。

第4回となります本年も、昨年に引き続き平成14年度文部科学省の21世紀COEプログラムに採択された本学の「先導的健康長寿学術研究推進拠点」の研究討論会も合同開催され愈々大規模になって参りました。

演題数をみますと、学長特別研究 - 特別推進研究はポスターを含め30演題、うち部局横断型特別推進研究5演題、後藤研究費受領研究11演題、茶先端生命科学研究22演題、21世紀COEプログラム、研究推進者、研究協力者の発表が44演題と膨大なものであり、評価を担当する学長以下の部局長は全員グロッキー気味でした。

大学という所は「隣の人はなにをする人ぞ」とも申すように、同じ学部の中でも別の教員がどんな研究を行っているのか知らないのが普通です。学部をまたがれば、言わずもがな「自分の専門外



を評価するなどおこがましい」と考えるのが常識です。一方で予算を獲得すれば、その成果が自動的に評価されるというのも常識になりつつあります。科学研究費等、殊に大型予算では教員の皆様ご承知の通りです。

では大学全体としては？ 最大の評価者は実はカスタマーである学生諸君でしょう。もし学生諸君でないとすれば学費を払っている府警と納税者である県民の筈です。その前に、この機会に普段語り合うことのない研究者同士がコミュニケーションをとって研究と教育の進化と深化に資することができれば多大な労を取っている事務職員のご苦勞も報われるものでしょう。

研究成果には、応用面の期待されるものが数多くあります。毎回県試験研究機関の方々が数多く見えられておりますが、地域産業への連携は公立大学最大の命題であります。本フォーラムは公開されており、このコミュニケーションの輪が学内研究者間のみならず地域産業界との輪になればと祈っております。

ついでに申せば、学生諸君は自らの判断で多くの専門家から、それぞれの専門分野を学ぶからこそ、一人ひとりの固有な価値が生まれるのだという自覚を新たにして勉学に臨む機会となればと存じます。



## 発表演題一覧(発表順) 3月2日(火)

### <学長特別研究・特別推進研究>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	園部 尚	薬学部・教授	混合操作条件および製造法が品質に与える影響
2	漁田 俊子	短期大学部・教授	同文脈下および異文脈下で行われる学習反復が知識形成に及ぼす効果

### <21世紀COEプログラム>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	伊勢村 護	大学院生活健康科学研究科・教授	糖新生系酵素遺伝子発現に対する緑茶のin vivo 効果
2	今井 康之	大学院薬学研究科・教授	ヘロ毒素に対する粘膜免疫の賦活化と分泌型IgA抗体の産生
3	奥 直人	大学院薬学研究科・教授	がん化学療法及び光線力療法の作用増強と副作用軽減を指向したDDS製剤の開発
4	合田 敏尚	大学院生活健康科学研究科・助教授	核内受容体の制御因子としての脂溶性食品成分の機能的な連関 - 脂質代謝調節への応用の視点から
5	小林 裕和	大学院生活健康科学研究科・教授	可食を目的とした植物形質転換系の開発
6	鈴木 康夫	大学院薬学研究科・教授	糖鎖機能によるウイルス感染症の克服 食用素材分子の応用
7	野口 博司	大学院薬学研究科・教授	1. カルコン合成酵素 (CHS) ファミリー遺伝子情報を活用した新規植物ポリケチド類の創製
8	山田 静雄	大学院薬学研究科・助教授	イチヨウ葉およびノコギリヤシ果実の抽出液の薬効解析と医薬品との相互作用
9	山形 一雄	大学院生活健康科学研究科・COEポスドク	脳卒中ラット由来アストロサイトの神経栄養供給と食品成分による調節
10	大橋 典男	環境科学研究所・助教授	ヒト単球エリキア及びヒト顆粒球アナプラズマ感染細胞の宿主応答におけるプロテオーム解析と糖尿病バイオマーカーの探索
11	大田 敏郎	大学院生活健康科学研究科・助手	癌予防のための血管新生抑制食品の開発
12	木苗 直秀	大学院生活健康科学研究科・教授	AGEに対するTHP-1細胞の生物応答とプロテオーム解析
13	熊谷 裕通	大学院生活健康科学研究科・助教授	新しい酸化・抗酸化マーカーの測定とその臨床応用
14	寺尾 良保	環境科学研究所・教授	内分泌攪乱物質の塩素処理副生成物及びそれらの内分泌攪乱作用
15	中山 勉	大学院生活健康科学研究科・教授	チャイニーズハムスターV79細胞過酸化水素耐性株のプロテオーム解析
16	菅谷 純子	大学院薬学研究科・助教授	薬物代謝酵素誘導に基づく生体順応性に関する食品成分の探索と評価法の研究
17	鈴木 隆	大学院薬学研究科・助教授	新型インフルエンザウイルスの出現・伝播におけるノイラミンダーゼの機能
18	出川 雅邦	大学院薬学研究科・教授	カルシウム拮抗薬による肝シトクロムP450の誘導：動物種差・性差
19	加藤 大	大学院薬学研究科・講師	トリプシン固定化マイクロチップの開発とタンパク質分析への応用
20	増澤 俊幸	大学院薬学研究科・助教授	病原性レプトスピラの毒化性に関するヘモグロビン結合蛋白LipL32 (Hap1) の性状、並びにワクチンへの応用
21	合田 敏尚	大学院生活健康科学研究科・助教授	COE拠点と地域保健・医療スタッフの連携による実践研究の試行と展開

### <21世紀COEプログラム・・・ポスター発表>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
22	阿部 郁朗	大学院薬学研究科・講師	スクアレン環化酵素を用いた非天然型新規環状イソプレノイドの創出
23	五十里 彰	大学院薬学研究科・助手	上皮細胞におけるマグネシウム輸送体パラセリン - 1 の発現と機能解析
24	黄倉 崇	大学院薬学研究科・助手	薬物代謝酵素及び薬物トランスポーターの活性調節作用を持つ食品成分の有効利用に関する研究
25	佐塚 泰之	大学院薬学研究科・助手	食品成分による癌化学療法剤腫瘍細胞膜透過性制御
26	武田 厚司	大学院薬学研究科・助教授	海馬での亜鉛による興奮性神経伝達物質グルタミン酸の放出調節
27	古田 巧	大学院薬学研究科・助手	プローブ分子の開発を指向したEGCG誘導体の合成研究
28	中山 貢一	大学院薬学研究科・教授	循環系のメカノトランスダクションと脳血管壁細胞に対する大豆由来チロシンキナーゼ阻害物質ゲニステインの作用について
29	吉成 浩一	大学院薬学研究科・講師	脂肪組織の遺伝子発現プロファイルに対する脂溶性異物の影響
30	伊吹 裕子	環境科学研究所・助手	環境因子による細胞の不活化および不活化誘導因子の探索
31	唐木 晋一郎	環境科学研究所・助手	ラット遠位大腸における短鎖脂肪酸の消化管運動に対する作用と短鎖脂肪酸受容体の分布
32	小林 公子	大学院生活健康科学研究科・助教授	体格指数 (BMI) の決定に關与する遺伝要因の検討
33	下位 香代子	環境科学研究所・助教授	ヒト乳癌細胞におけるエストロン硫酸の利用能と利用阻害因子
34	鈴木 裕一	大学院生活健康科学研究科・教授	尿中酸塩基排泄の日内変動
35	橋本 伸哉	環境科学研究所・助教授	化学物質による精子運動能への影響と生殖毒性に関する研究
36	堀江 信之	大学院生活健康科学研究科・助手	DNA合成関連遺伝子の多型性が生体および細胞機能に与える影響について
37	吉岡 寿	環境科学研究所・教授	OHラジカルとの反応で生成するDNA塩基ラジカル
38	渡辺 達夫	大学院生活健康科学研究科・助教授	香辛野菜中のカプサイシン受容体賦活成分
39	坂野 勇一	大学院薬学研究科・COEポスドク	植物由来プレニルトランスフェラーゼ遺伝子のクローニング並びに機能解析
40	関本 征史	大学院薬学研究科・助手 (前職・COEポスドク)	カルシウム拮抗薬による肝シトクロムP450の誘導機構に関する研究：培養細胞株を用いた検討
41	清水 正則	大学院生活健康科学研究科・COEポスドク	AHASを選択マーカーにした葉緑体形質転換系の樹立
42	山形 一雄	大学院生活健康科学研究科・COEポスドク	脳卒中ラット由来神経細胞の虚血性障害の予防と栄養供給機能
43	鈴木 綾子	大学院生活健康科学研究科・COEポスドク	分化型小腸様モデル細胞株C2BE-1における消化吸収関連遺伝子の転写制御と核内転写調節因子等の活性化による転写制御機構の検討
44	マリーナ マグダラネ アロイス ジェレケラ	大学院生活健康科学研究科・COEポスドク	緑茶および関連物質の脂質代謝酵素発現に対するin vivo 効果

## 3月3日(水)

### <学長特別研究・特別推進研究>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
3	中山 貢一	薬学部・教授	肺循環における非転換型プロスタグランジンH2産生機構特異性とモノクロタリン誘発肺高血圧症における意義について
4	藤井 敏	薬学部・教授	Ca <sup>2+</sup> 結合蛋白質S100A8/A9 ヘテロ二量体のCrystalIi z ability
5	佐藤 雅之	薬学部・教授	酵素並びに有機塩基触媒を用いる効率的有機合成
6	小林 公子	食品栄養科学部・助教授	肥満に關する遺伝要因と生活習慣の相互作用
7	橋本 伸哉	環境科学研究所・助教授	駿河湾沿岸域における多環芳香族炭化水素誘導体の動態と生物への影響評価
8	五島 廉輔	環境科学研究所・教授	紫外線による塩素化ビスフェノールAの構造および生物活性の変化

<学長特別研究 - 特別推進研究・・・ポスター発表>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
9	福島 健	薬学部・助教授	マイクロダイアリシスを用いる生体内D-セリンのin vivo解析に関する研究
10	井口 和明	薬学部・講師	下垂体性ウロコルチンおよび関連ペプチドのACTH分泌調節
11	根本 清光	薬学部・講師	RNA干渉法を用いた神経栄養因子の機能解明
12	石田 均司	薬学部・講師	神経性貝毒Brevetoxinの超高度分析法の確立及び毒化員への適用
13	石井 康子	薬学研究科・講師	静岡県立病院における抗うつ薬の使用状況調査と新規抗うつ薬のHPLC高感度測定法の検討
14	藤井 敏	薬学部・教授	基礎・専門実習の高度化に関する研究
15	駿河 和仁	食品栄養科学部・助手	核内レセプターのリガンド応答性における脂質結合タンパク質の役割
16	鈴木 浩史	食品栄養科学部・助手	有機スズにより誘導される膵臓細胞特異的なアポトーシスの実行メカニズム - 核内レセプターTR3の転写制御活性と局在変化の検討 -
17	佐藤 努	食品栄養科学部・助手	貧血症状の変化から窺える、鉛にたいするコイの順応の可能性
18	牧野 正和	環境科学研究所・助教授	ハロゲン化ダイオキシン類の分子構造指標とAh-R結合能との相関に関する研究

<後藤研究(茶先端生命科学研究所)の部・・・ポスター発表>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	高林 ふみ代	短期大学部・講師	過酸化脂質摂取が膵組織および肝組織DNAの酸化傷害指標物質8-oxodG量に及ぼす影響
2	奥 真人 木ノ内 直美	(口頭)薬学部・教授 (ポスター)薬学研究科・大学院生	緑茶によるがん予防効果検討に向けた、ヒトのがん年齢を意識したがん転移評価系の確立
3	宮瀬 敏男	薬学部・助教授	メチル化カテキンの化学的誘導とそれらの生物活性に関する研究
4	前田 利男	薬学部・助教授	お茶のインスリン抵抗性発現予防作用に関する研究
5	片山 誠二	薬学部・助教授	香り成分の多変量解析による緑茶のキャラクタライゼーション
6	菅谷 純子	薬学部・助教授	茶ポリフェノールの血栓形成初期段階に認められる凝集血小板解離作用について
7	加藤 大	薬学部・講師	プラスチック製マイクロチップを用いた茶成分の簡便な分析法の開発
8	佐野 満昭	薬学部・助教授	茶カテキンおよびそのC-2異性体のマウスにおける吸収と抗酸化活性について
9	阿部 郁朗	薬学部・講師	緑茶テアニンの生合成研究
10	小原 一男	薬学部・講師	ブタ冠動脈攣縮に対するお茶エピガロカテキンの作用
11	宮城島 惇夫	薬学部・講師	Ehrlich腫瘍がん細胞における抗がん剤の取り込み・排出に緑茶含有成分が与える影響
12	黒羽子 孝太	薬学部・助手	Ni板皮下移植によるTh2型応答を示すNiアレルギーモデルマウスの作製
13	尾形 雅君	薬学部・助手	カテキンによるエストロゲン様環境ホルモン作用の抑制効果検討を目的とするキンギョを用いたin vivo試験研究
14	佐塚 泰之	薬学部・助手	緑茶アミノ酸 Theanine のアルコ - ル代謝に及ぼす影響
15	伊勢村 護	食品栄養科学部・教授	緑茶成分エピガロカテキンガレートの癌細胞選択的アポトーシス誘導作用のメカニズム
16	熊澤 茂則	食品栄養科学部・助手	固体NMR法を用いたEGCgの脂質二重層中における配向解析
17	久留戸 涼子	食品栄養科学部・助手	フラボノイド類の塩素処理生成物の生理活性に関する研究
18	増田 修一	食品栄養科学部・助手	がん発生とニトロソアミン生成に対する緑茶濃度の影響
19	森安 裕二	食品栄養科学部・助手	チャの葉肉細胞におけるカテキンの液胞内局在
20	吉岡 寿	環境科学研究所・教授	ポリフェノールのO-H結合エネルギーと抗酸化能との相関
21	新保 真理	食品栄養科学部・助手	糖尿病境界型における緑茶飲量と身体、血液性状、食塩味覚閾値との関連
22	中村 敏郎	生活健康科学研究科・助手	茶カテキンEGCgによる癌血管新生抑制の生化学的解析
	中村 好志	薬学部・助教授	黒茶の成分と発がんプロモーション抑制作用
	石川 智久	薬学部・助教授	NOによるインスリン分泌調節に対する茶カテキン類の作用
	池本 守	薬学部・講師	がん細胞における脂肪蓄積に関する研究
	丹羽 康夫	食品栄養科学部・助手	栽培条件によるチャ遺伝子発現変化の解析

3月4日(木)

<学長特別研究 - 特別推進研究>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
19	増澤 俊幸	薬学部・助教授(学部横断)	レプトスビラDNAジャイレースBサブユニットgyrB遺伝子系統解析による分類法確立と迅速リアルタイム検出法の開発
20	木苗 直秀	食品栄養科学部・教授(学部横断)	ビスフェノールAの亜硝酸処理に伴う変異原性とエストロゲン活性の変動
21	鈴木 裕一	食品栄養科学部・教授(学部横断)	ATPの細胞外メッセンジャーとしての多彩な生理機能と、その病態における役割について
22	石川 准	国際関係学部・教授(学部横断)	次世代音声ブラウザの開発
23	渡辺 聡	国際関係学部・教授	東アジアにおけるポピュラー文化の相互交流
24	西田 ひろ子	国際関係学部・教授	日本人・米国人・中国人・スウェーデン人のコミュニケーション行動の特質についての認知的基礎研究
25	平岩 俊司	国際関係学研究科・教授	東アジア国際環境の変動と朝鮮半島 - 「6カ国協議」の成果と課題
26	津富 宏	国際関係学部・助教授	静岡県立大学国際関係学部生の就職支援を充実するために
27	竹中 厚雄	経営情報学部・助手	静岡県の楽器産業に関する研究
28	武藤 伸明	経営情報学部・講師	有限空間への図形の配置問題に関する研究と関連する幾何学ライブラリ開発
29	木村 忠直	看護学部・教授	腰部における脊柱起立筋の筋線維型構成について
30	小寺 栄子	看護学部・教授	変化する健康意識の中での大卒における臨床看護実習指導体制のあり方の検討 - 大学と実習施設間の望ましい実習指導体制と連携のあり方について -

<後藤研究(一般研究)の部>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	阿部 郁朗	薬学部・講師	コレステロール生合成酵素の精密機能解析を基礎とする低コレステロール食品開発のための基礎研究
2	武田 厚司	薬学部・助教授	亜鉛摂取不足による海馬グルタミン酸作動性ニューロンの過剰興奮
3	田辺 由幸	薬学部・助手	バイオメカニカルストレスによる脂肪細胞分化の抑制機構と薬物制御
4	加藤 善久	薬学部・講師	食品中の残留有害成分による複合影響と食品の安全性評価系の確立に関する研究
5	吉成 浩一	薬学部・講師	高脂肪食負荷動物における肝薬物代謝酵素レベルの変動
6	糠谷 東雄	薬学部・助教授	烏龍茶中の抗アレルギー成分OTACの他種茶葉中含量と生成機構について
7	横越 英彦	食品栄養科学部・教授	タウリンによるCYP7A1遺伝子発現誘導機構の解析
8	堀江 信之	食品栄養科学部・助手	細胞増殖抑制に伴う増殖関連遺伝子の発現抑制機構の解析
9	木村 正人	看護学部・教授	ラット微小血管閉塞性進行性慢性腎不全の進行に関する食塩摂取量の影響
10	池田 雅彦	環境科学研究所・助手	ニワトリの産卵に対するダイオキシンの影響と卵への移行
11	唐木 晋一郎	環境科学研究所・助手	モルモット連位大腸におけるプロピオン酸の作用と短鎖脂肪酸受容体の分布

# 実り多い第13回日本メイラード反応研究会が無事終了

第13回日本メイラード反応研究会 実行委員長 木苗 直秀 (食品栄養科学部)

第13回日本メイラード反応研究会は平成15年12月4日(木)と5日(金)の両日、日本平ホテルにおいて開催された。本研究会は糖とアミノ酸、糖とタンパク質の縮合反応(発見者の名前に因んでMaillard反応と言われる)による生成物が、食品中での褐変現象や生体内での糖尿病合併症や老化促進と深く関与することから、国内では毎年、国際会議も3年毎に開催されている。

当日にはまっ白な雪を頂いた富士山が見え、二人のエキスパートを外国から招待することが出来た。米国のV.M.Monnier教授(ケースウェスタンリザーブ大学)には“Green tea, vitaminC and the Maillard Reaction in Diabetes”について、また英国のP.J.Thornalley教授(エセックス大学)には、“Quantitative screening of glycation adducts by LC-MS/MS” - New insights into the cellular and physiological formation and clearance of glycation adducts in diabetes, uremia and cirrhosis-と題して特別講演を頂いた。初日は「メイラード反応が関与する糖尿病の発症と予防」のシンポジウムを開催し、

2日目は「若手モーニングセミナー」を朝食をとりながら皆で楽しむことが出来た。また、一般口頭発表17題、ポスター発表5題のほか、小生が「メイラード反応と共に歩んで」と題して実行委員長講演を行った。

参加者はおよそ100名と決して大きな研究会ではなかったが、大部分の出席者が日本平ホテルに宿泊し、初日は夜遅くまで、2日目は朝早くから研究中心の意見交換をすることができて極めて有意義な会となった。このことは頂いたアンケート調査からも十分に裏づけられた。なお、大会の前日3日(水)には二人の外国人講師を招いて本学で特別講義を開催したところ、およそ60余名の出席を頂いた。本大会が静岡県、静岡県立大学ならびに静岡県立大学21世紀COEプログラムとの共催で成功裡に終えることができたことを大変嬉しく思っております。また、実行委員としてお手数を煩わした本学教員ならびにお手伝い頂いた本学学生諸君に厚く御礼申し上げます。



## 看護学部の動き

看護学部長 木村正人

平成9年に開設した本学部も今年度（15年度）で7年目となり、平成13年開設した看護学研究科も3年目を迎えました。開設当時の新鮮さも次第に消え、そろそろ熟成の季節に入らなければならない時期にさしかかっています。全国で4年制学部が100を超え、看護教育にとって4年制学部の存在それ自身での希少価値は希薄になっています。看護を目指す学生に対して、静岡県立大学看護学部の存在を強く印象づけ、引きつける新しい魅力を、自ら磨き上げる時期にあると考えています。

### 1 学部概況（平成15年度）

在籍学生数などの概況から申しますと、学部学生数 252名、研究科学生数17名です。学部はこれまで3回の卒業生（173名）を送り出し、平成14年3月には初めての看護学研究科の第1回修了生5名が誕生しました。

教員の移動等では、15年4月に小寺栄子教授（基礎看護学）、中島登美子教授（小児看護学）、西村ユミ助教授（成人看護学）が、16年1月に助手の河内俊二先生（精神看護）が着任されました。また、6月1日付で石村佳代子先生（精神看護学）が講師に昇任しました。その結果、現在、看護学部教員は教授9名、助教授5名、講師7名、助手14名の35名で構成されていますが、16年4月から地域看護および成人看護にそれぞれ教授が着任される予定です。これにより、成人・老人領域を二人の教授で担当することになり、新しい指導体制のもとで教育が行われます。

14年度卒業生の国家試験合格率は看護師が

98.3%（全国で92.6%）、保健師が95.8%（同91.5%）、助産師は90.9%（同89.2%）と、全国の状況と比較して高い水準を維持しています。就職状況では、14年度卒業生58名は学生の臨地実習関連病院など看護師および助産師としての就職がそれぞれ50名（86%）、4名（7%）、県や市町村へ保健師としての就職が4名（7%）で、就職率は100%でした。また、開設以来高い志願率を維持している社会人および編入学選抜では、本年もそれぞれ6.5倍、10.1倍の高倍率となりました。編入学試験ではこの制度への臨床現場や社会的ニーズの高いことを考慮し、入学定数の改訂後の初めての入試となりました。編入学試験の入学定数は平成17年度までは移行期のため5名となっていますが、18年度からは10名となり、受験生にとってこの制度はさらに活用しやすくなったといえます。なお、入学者に対する男子学生の数は初年度より1～4名の間で推移しております。医療における看護に対する社会的需要の高まり、男女共同参画社会の実現へ向けて、さらに男性の進出を期待したいと思います。

### 2 特別委員会の課題

14年度4月から発足した「カリキュラム検討委員会」と「入試検討委員会」を継続委員会として、学部運営の根幹である入試関連問題およびカリキュラムについて検討を続けています。カリキュラム改訂は学部の理念からの根本的な見直しを行い、大幅な改正になることが予想されるために拙速をさけて、平成17年度からの新カリキュラムを目指し精力的に活動を続けているところです。

一方、入試検討委員会では、各入試形態の見直しを含めて検討中ですが、今年度からの入学者定数の変更による入試状況の推移を見つつ検討することを考えています。ただし、平成17年度入試より、これまで社会人特別選抜および編入学試験に課していた英語を廃止し、多様な受験生のニーズに対応できるようにしました。

### 3 研究と教育

看護学部における研究はそのフィールド（場）が重要な要素を占めています。付属病院を持たない看護学部の弱点として研究の“場”をゼロから作ることから始めなくてはなりません。開設後、学生の臨地実習を指導しながら研究の“場”を開拓し、研究を進めていきましたが、その成果が徐々に現れ、科学研究費の交付数も平成12年度4件、13年度3件、14年度8件、15年度10件と着実に上昇しています。

15年度の新しい試みとしてギガビットネットワークを利用した遠隔授業の試みを経営情報学部の協力を得て、三重県立看護大学との間で行われました。このような方式は今後ますます普及してく



るものと実感しました。

### 4 社会との接点

大学として教育・研究の充実は当然のことであり、近年、社会への貢献という視点で大学をみる

ことの重要性が認識されてきています。看護学部としても教育・研究の成果の社会への有効な還元を常に視野において活動してきましたが、15年度はこれに関して大きなイベントが行われました。静岡県が主催県として平成15年10月8日から3日間行われた第3回全国障害者スポーツ大会「わかふじ大会」の専門ボランティア「わかふじアミー」として学部2年生と4年生の120人余が参加したことです。3日間障害者の方と心身共にふれあいを持つことで感動的な経験をすることができ、実行委員会からも大変感謝されると同時に本



学学生に対して高い評価を受けました。

また、学生主体の災害時の救護のためのボランティア活動グループ「防z」の活動や学部の助手を中心に作られている健康増進研究会による剣祭当日の骨密度測定イベントなど、毎年行われ、地域に根付いた活動も例年どおり行われました。

### 5 同窓会設立

昨年までに3期173名の卒業生が社会に旅立ちました。同じ大学で学び、様々な場所で活躍する卒業生を結ぶものとして、同窓会を設立する気運がたかまり、平成15年12月13日に第1回静岡県大看護同窓会総会が開かれ、卒業生50名余が集まりました。今後は親睦のみならず、看護の知識を深め、臨床の経験を深める場としての活動も目指しています。

# 環境科学研究所の動き

環境科学研究所長 五島 廉輔

環境科学研究所では平成14年度に自己点検報告書を作成し、それに対する外部評価に基づいて、三つの特別委員会（組織・形態検討委員会、大型プロジェクト検討委員会、資格試験検討委員会）を発足させ、2年目を迎えました。組織・形態検討委員会は平成17年4月から実施される予定の独立法人化を視野に入れた、環境科学研究所・大学院環境物質科学専攻の将来構想案をまとめました。研究所および大学院の充実と将来における学部設立構想が記載されています。廣部学長から貴重なご意見をいただき、さらに充実した構想案を作成中です。大型プロジェクト検討委員会からは研究所教員の横断的組み合わせにより2件申請しました。資格試験検討委員会では今年から受講生を募り、講義等を始めましたが、現在のところ希望者が少なく、今後に期待をつなげたいと思っています。

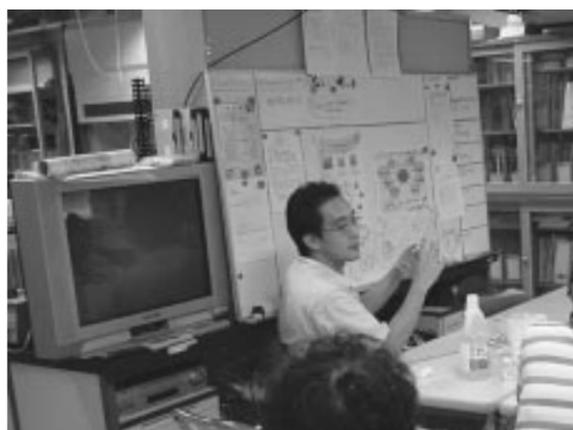
教員人事では神谷護前物性化学研究室教授の定年退官に伴い、後任に牧野正和助手が助教授に昇格しました。その後任には寺崎正紀助手が決まりました。また、環境生理学研究室のマイケル・セレグレン助手がドイツの研究所に移られたため、唐木晋一郎助手が採用されました。

環境科学研究所の対外活動として次のような活動を行いました。

- (1) 「県民の日」の研究所公開
- (2) 環境学習サポーター養成講座
- (3) 環境研究交流しずおか集会
- (4) 環境体験実習
- (5) 計測連合シンポジウム

(6) サイエンス・パートナーシップ・プログラム

(7) 森林環境フェアへの参加



研究所の一般公開

研究所一般公開当日は天候にめぐまれ、子供たちを含めた約150名の県民が訪れ、研究機器などを非常に興味深く見学していました。子供を対象にした催し物もあり、元気な声が一日中響いていました。環境学習サポーター養成講座は当研究所主催となって2回目を迎えましたが、今回は63名の応募者があり、10月4日から11月22日まで毎週土曜日に開講しました。年配の方の参加が多かったですが、真剣に聴講されていました。環境研究交流しずおか集会の今年のテーマは「健



環境学習サポーター養成講座

康で安全な室内環境に向けた取り組み」でした。近頃問題になっていきますシックハウス症候への対策が注目され、多数の参加者とともに活発な討論がなされました。日本学術会議・第5部・計測工



環境研究交流しずおか集会

学専門委員会等が主催で行われていた計測連合シンポジウムは、今年をはじめで地方で開催されることになり、当研究所の岩堀教授が副委員長として、運営に当たられました。“計る、測る、量る”をテーマに7名の講師により、興味ある講演が行われました。東海大学付属翔洋高校の平成15年度サイエンス・パートナーシップ・プログラム「研究所招へい講座」には、当研究所の吉岡教授と下位助教授が講義と実習の依頼を受け、平成15年11月～12月に計4回実施しました。40名の生徒が研究所に訪れ、化学物質の環境に与える有害性、有益性について学びました。9月に開かれた森林環境フェアには、当研究所の2研究室が参加して、研究所の研究内容などについてPRしました。

環境科学研究所全員で研究所の発展に取り組んでいます。独立法人化を前にして、地域貢献はもとより国際的情報発信拠点となるべく更なる努力が必要であると思っています。

## 計測シンポジウム成功に日本学術会議から感謝状！

昨年9月本学において開催された「第14回計測連合シンポジウム」の成功により、日本学術会議から主催者の中心を担った環境科学研究所に対して3月9日、感謝状が贈呈された。

日本学術会議が感謝状を贈呈することは極めて稀であり、本学に日本学術会議計測工学専門委員会の小林彬委員長らが訪れ、廣部学長立会いのもと五島廉輔環境科学研究所長に感謝状を直接贈呈した。

計測シンポジウムはこれまで東京で行われていたが、環境科学研究所の岩堀恵祐教授が本学で開催することを提案し、初の地方開催が実現した。シンポ

ジウムには県民ら約150名の参加があり、食、環境、宇宙などの最先端の計測方法が一般向けに分かりやすく解説され大変好評であった。



## 「強い骨を作ろう！2003」骨密度測定イベントの結果報告

健康増進研究会（看護学部助手有志）

剣祭での無料骨密度測定イベント「強い骨を作ろう！」も3年目が無事終了しました。11月1日当日は朝方まで雨でしたが昼頃からよく晴れて暖かい1日でした。その陽気にも助けられ、今回も学内外から350人以上の方がご来場くださいました。



たった1台の超音波骨密度計でがんばっているので、測定待ちは最大1時間にもおよびましたが、

	男 性			女 性			合計
	10~20歳代	30~50歳代	60~80歳代	10~20歳代	30~50歳代	60~80歳代	
学内(人)	53	3	0	105	2	0	163
学外(人)	21	17	17	23	44	45	167
合計(人)	74	20	17	128	46	45	330

また、骨密度の測定経験が2回目以上だという人が3割近くいました。さらにリピーターを増やせるよう、イベント内容をますます充実していきたいと思います。今回は、自分の骨密度をその場でグラフに載せてみてもらうという試みを行い、楽しんでいただけました。

気になる骨密度の測定結果ですが、受検者それぞれの年齢に対して「ほぼ同等」と評価された人がほとんどでした。一番骨密度が高かったのは本

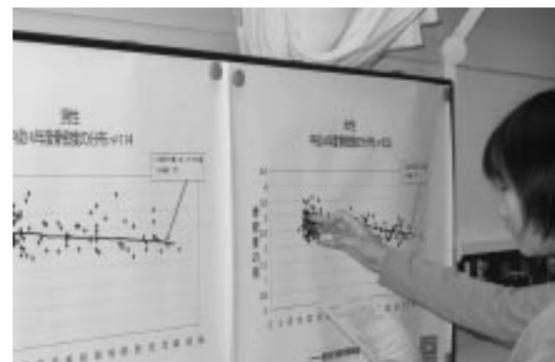
人気イベントになって有志一同喜んでいますが、これからも、自分の健康状態を気軽にチェックすることができる場を、学生、教職員、および地域住民のみなさんにご提供できるように、イベントを続けていきたいと思っております。今回はあきらめて帰られた方も、辛抱強く待ち続けてくださった方も、これに懲りずにぜひまたお越し下さい。

本稿では、イベント当日の様子を写真でご覧いただきながら、測定結果の概略をご報告します。今回も身長、体重、体脂肪率、骨密度の測定と生活に関するアンケートを実施しました。さらに希望者には、栄養相談と運動相談も行いました。骨密度を測定した人は330人で、表のとおり、学内（学生・教職員）と学外（地域住民・学生の友人など）が半々でした。最も多かったのは本学の女子学生で、約3割を占めています。

学ラグビー部に所属している男子学生で、同年齢男性の平均と比べて143%と評価されました。

一方アンケート結果からは、学生の食生活や運動習慣について多少気になるデータが見られました。男女ともに、食事内容のバランスがあまりよくないようです。男子学生では朝食をきちんと摂っていない人が半数以上でした。

運動習慣についてはもう少し細かくご報告しましょう。



過去1年間の運動習慣は、男女合わせて定期的に運動している人は165人（50%）、していない人は165人（50%）でした。男女別に10~20歳代、30~50歳代、60~80歳代の年代に分けてみると、運動習慣が多かったのは男女ともに60~80歳代（約70~90%）で、健康増進を実践していることがうかがえました。反対に少なかったのは、10~20歳代女性（約30%）であり、この年代は骨密度を効果的に増やすことができることを考えると、大きな問題でしょう。

全ての年代で、運動をする理由・しない理由をみると、運動する理由は「体の健康作り」、「楽しいから」と答えた人が多くいましたが、運動しない人の理由は、「時間がない」、「場所がない」が多



く、「必要性を感じない」という人は僅かでした。また、10~20歳代女性では「方法がわからない」という答えも多かったです。運動については、必要性がわかっているにもかかわらず、時間や環境を整えることができず、定期的には実行できないことが考えられ、もっと身近に運動しやすい場所があり、体を動かすことを楽しめる環境が望まれていると思われました。

もっと知りたい方は、私たちのホームページをご覧ください。看護学部のサイトからリンクが貼られています。

それでは、また「強い骨を作ろう！2004」でお会いしましょう。

## 地域経営研究センター設置について

経営情報学研究科

大学院経営情報学研究科では社会の大学に対するニーズの高度化・複雑化・多様化に対応し、地域に密着した高度で専門的な最新の知識を提供するため、平成16年4月、研究科内に「地域経営研究センター」を新設する。

センターの場所については、経営情報学部棟2階4211、4210となる。

社会人学習推進拠点としての社会人学習プログラムの提供と開発、並びに、地域の大学として地

域の当面する諸問題の解決策、活性化案等を研究し、地域の発展に向けて種々の提言をしていく。

センター長を影山教授が担当し、ユン助教授、渡邊助手が常勤メンバーとなる。

研究科の昼夜開講とも併せ、社会人学習においてインタラクティブな講義を行うため、円形に机を配置しディスカッションを主とした学習形態とし、外部の人達ともやり取りのできるサロンのような場所を目指す。

## 薬学部退官教授の最終講義を開催

県立大学で40年以上にわたり薬学の教育・研究の発展に力を注がれ、本年度で退官される横田正實、木村良平両薬学部教授の最終講義が2月28日(土)午後1時より小講堂において開催され、本学の学生や、卒業生、学内外の関係者など約200名が熱心に講義を聴講した。

横田教授は、「中国医学の弁証論治」を演題に、漢方では現在の病名ではなく、証という概念に基づいて、漢方薬を用いて治療を行い、そのプロセスである、証の決定方法と漢方薬の選択方法について平易に解説された。



木村教授は、「静岡の薬剤学」を演題に薬剤師にとって必須の学問分野の一つである薬剤学の理念について、静岡薬科大学、静岡県立大学薬学部を通して行ってきた講義内容に触れながら、米国と日本の薬学教育の違いについても触れ、これからの薬学教育のあり方について私見を述べられた。



## 受賞

### 平成15年度(社)電子情報通信学会学術奨励賞受賞

渡邊 貴之 経営情報学部助手

題名 モデル縮小法を用いた回路・電磁界混合解析

### フォーラム2003：衛生薬学・環境トキシコロジー(仙台、平成15年10月24日)で実行委員長賞受賞

南 彰(薬学部医薬生命化学教室、博士2年)

発表演題：海馬でのグルタミン酸放出に対する亜鉛の抑制機能

## 採択

### 平成16年度日本学術振興会特別研究員採択

南 彰(薬学部医薬生命化学教室、博士2年)

研究課題：亜鉛の多角的な作用による興奮性ニューロンの抑制とその機構解析

指導者：武田厚司

## 教員の人事

### 就任

(1月1日付け)

稲田 晴年 国際関係学部長

### 昇任

(1月1日付け)

大澤 隆幸 国際関係学部教授

### 採用

(1月1日付け)

関本 征史 薬学部助手  
河内 俊二 看護学部助手

2月1日付け)

浅井 知浩 薬学部講師

## 院生からのメッセージ

## ～静岡に育つ～

薬学研究科製薬学専攻  
博士課程1年 清水広介

静岡はいいところだ、と多くの人は言う。静岡の人はのんびりしていて、毎日富士山のことを考えている。気温もちょうど良い。そんな恵まれた環境の中、僕は育ち、学んできた。そしてこの春、博士後期課程2年になる。

1997年にこの静岡県立大学に入学した。この大学を選んだ理由は、一言で言うならば「近から」であった。高校の頃、冗談半分でがんの特効薬を作りたいという無謀な夢を打ち立ててしまい、とりあえず最も近かったこの静岡県立大学の薬学部を目指した。当時、成績から考慮してこの大学を受験して合格することが無謀であるということを知っていただろうが、とりあえず努力をしていた。そうしたら合格した。何が良かったのか。奇跡かそれとも努力が実ったのか……。そして静岡県立大学に入学。授業や実習はできるかぎりまじめに取り組んだ。教わることが常に新しいことであり、とりあえず教わったことを無理矢理頭に詰め込んでいた。テスト前の勉強における努力は常に忘れなかったが、再試になることが何度もあった。しかし、最終的には単位を取得することができた。今となっては言えることだが、当時、今やっていることがなぜ必要なのか、何につながるのか、と本質がわかっていなかった。当時は与えられたことをそのまま行うという狭い視野で何ごとも行っていたが、大学院生になった現在は何かと疑問を持ち、広い視野で見れるようになった。

学部生の時、自分の向かう方向性を急速に変換させることが起こった。研究室への配属である。この学部において自分がやりたいことは何か。忘れかけていた自分の目標が思い出される。がんの特効薬の開発だ。迷いなくその方向性の研究を行っている研究室を選んだ。幸い、がん治療の研究を行っている研究室があり、その研究室を選んだ。入りたいという強い意志を持っていたせいか、無事希望する研究室に配属できることが決まった。研究室での生活は今まで学生として授業を受けて

きたものとは大きく違い、学ぶこともかなりあった。学部生の頃はある意味個人で動いてきたが、研究室は集団行動であった。研究室とは小さな会社のようなものだと考えている。教授と言う社長がいて、社員のような学生がいる。研究室を伸ばすためには学生が頑張る研究をする。しかしその研究も適当に行うわけではなく、責任をもって行う。適当にやっていたらその会社は落ちてしまうからだ。そしていい研究をするためにはそこにいい環境をつくる。小さな社会ができていく。そこでうまくやっていくためにはまず自分のやっている研究に興味がなくはないと思う。そして最も大事なことは何ごとにも努力をすることだと思ふ。「努力は無限」僕は常にそのことを考えている。努力には計り知れない可能性が秘められているからだ。それはすぐ結果として出るとは限らないが、いつか必ず努力してよかったという日が来る。自分も実際努力したせいか、入学試験や国家試験に合格することができた。学部生の頃、何も理解せず努力してきたが、今となってはすごい財産となっている。何ごとにも努力は必要だ。そして楽しむことも必要だ。僕の研究室の教授はよく言っている「よく学び、よく遊べ」。楽しむことができるからこそ努力ができる。今の自分があるのもそのことを常に思っているからであり、そして僕は今胸を張って言うことができる「がんの特効薬を作りたい」。

この静岡という過ごしやすく恵まれた環境の中、よく学び、よく遊び、そして目標を決め、精いっぱい努力してください。



## 研究室・ゼミ紹介

### 「薬学の免疫学」をめざして

薬学部 微生物学教室

そもそも免疫には、様々な微生物によってひきおこされる感染症から体を守る重要な働きがあります。体の表面は皮膚と粘膜で構成されています。特に粘膜は体の中で広大な表面積を占めており、細菌やウイルスの侵入ルートになっています。私たちは、粘膜免疫の機構を研究しつつ、実際に役に立つ研究はないかと考えてきました。粘膜表面で防御に働く免疫グロブリンAを自由に誘導する方法を確立し、抗体医薬にまで高めていくことで、予防と治療を視野に入れた薬学的な研究に育てていきたいと考えています。

一方、病原微生物は、免疫系と闘い、巧妙にごまかし、病気を引き起こします。微生物の戦略を知ることも防御免疫の理解にぜひ必要です。このところ問題となっているレジオネラ菌の戦略についても研究を進めています。また、免疫の負の側面であるアレルギーについても、身の回りに存在する様々な化学物質にアレルギーを促進する働きがあるかどうかを究明中です。

現在の教室のメンバーは、教員4名（教授、助教、講師、助手）、大学院生9名、学部4年生7名、客員共同研究員1名の合計21名です。毎年必ず研究室旅行にでかけて親睦をはかっています。教室のメンバーの意外な側面を見つけることもできるので、楽しみです。

大学院での研究の過程や卒業実習においても、自分で考えをまとめて、それを整理して他の人に伝える力を養うことを重視しています。医療をはじめとした様々な職業にそれが生かされていくことを願っています。



### 食と健康の分子機構から健康長寿実践活動の支援まで

食品栄養科学部 栄養生理学研究室

私たちの研究室では、栄養素や食品由来の生理活性成分がどのような仕組みで私たちの健康を維持するために役立っているのかという原理を遺伝子や分子にまでつきつめて解明しようと、教員2名と大学院生（6名）、学部4年生（2名）、客員共同研究員（3名）、ポスト・ドク研究員が一体となって研究に取り組んでいます。

栄養科学は実践の学問領域ですから、明らかにした原理を私たちの健康増進のための方策へと統合することが重要です。いわゆる健康食品の情報が氾濫する中で、真に重要な食品成分の利用法を科学的根拠（エビデンス）に基づいて正しく提案できる知性が期待されています。そこで、21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠

点」の臨床疫学研究部門の代表研究室として、機能性食品成分のエビデンスを効率よく生み出し、発信するための連携型研究システムの構築や、それを支える実践科学者の養成にも真正面から取り組んでいます。現在の最重要課題は、生活習慣病の一次予防活動を支援するための健康指標を明らかにすることです。

研究室のメンバーは、こつこつと課題に立ち向かう「主体性」をひとりひとりが維持しながらも、仲間に関心を配り、伝統的に和やかな雰囲気が醸し出されています。誕生日会などの親睦会は研究室内で頻繁におこなわれています。隔年に開催され

る同門会では、栄養専門家にとって新しいパラダイムを発見するための多くの話題が提供され、生涯にわたる研鑽の情熱を支援しています。

（合田敏尚）



### 現代を豊かに生きるための日本人の知恵を求めて

国際関係学部 八木ゼミ

私たち八木ゼミは4年生5人・3年生1人の少人数で、和やかな雰囲気の中、文学を通じた思想の研究をしています。今年は藤沢周平の歴史小説に込められた思想を解明しようと、長い作品の中のたった一つの台詞にこだわったり、作品の展開に呼応している色彩の変化に焦点を当てたりしながら作品を読み解いています。

ゼミは毎回、その回の題材となった作品を全員が読んできて、代表者が自分の関心のあるテーマについて発表し、それについて全員で議論するという形式で進められます。作品に込められた思想を知るためには、その作品を一字一句もろさずに何度も読まなければならないのですが、これが意外と大変で、ただ読んでいるときには気にならない、なんでもない一言が、作品に込められた思想を象徴していたり、重要な意味を持っていたりすることがあります。また、今年のように歴史小説を読み解く際には、単に作品を読むだけでなく、

その時代の生活習慣や身分制度など、作品を深く理解するための予備知識も研究しなければなりません。

そんな八木ゼミでは、先生と楽しい話をする食事会も開いています。春はお花見、忘・新年会に、ゼミ合宿。卒業生が参加することもあり、就職活動のアドバイスをもらうこともでき、ゼミ合宿では料理上手な八木先生の手料理を食べることがができます。

とても仲のよい、楽しいゼミです。興味を持った方は是非遊びに来てください。



## 国際交流提携大学から教員・学生が来学

県立大学と学术交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）及び浙江大学から教員と学生が来学した。

MGIMOからは国際関係学部日本語科講師スラトコーヴァ、エカテリーナ先生が1月下旬から2月末日まで滞在され、その間、国際関係学部の教員とロシア語から日本語への翻訳の研究をされた。交換留学生では同じく国際関係学部の学生でノーソヴァ、イリーナさんが1月から4ヶ月間、クラブチェンコ、ヴィクトリアさんが2月の1ヶ月間それぞれ滞在され、国際関係学部の講義を聴講したり、学生と交流を重ねるなどした。その活発な活動と日本語の流暢さに本学の学生は驚きを隠せない様子であった。

浙江大学からは、薬学院弁公室主任の劉偉（Liu Wei）先生が1月下旬から3月上旬まで、受入れ教員の野口博薬学研究科教授のもとで中国伝統医薬に関する研究が行われた。



## 和食パーティーで交流

モスクワ国立国際関係大学からの交換留学生ヴィクトリアさん(愛称ヴィカ/写真中央)を招いて、和食パーティーを開きました。大学で5年間、みっちり勉強したとあって日本語がとても上手な彼女、もちろん”桃の節句”も御存じです。栄養学科の二年生は日本の家庭料理を楽しんでもらおうと、貝沼先生に助けられつつ奮闘しました。ヴィカが作ってくれたブリヌィ（ロシア風クレープ）は、2月末に開かれるロシアの祭り”マスリニツァ”で食べられる伝統料理。丸くて金色のブリヌィが春の太陽に似ているから、と。太陽の見えない、ロシアの長い冬が思い浮かびますね。国際関係学部の島田先生お手製、きびのカーシャ（お粥）も参加して、まさに日露料理対決!?!いえいえ、

大昼食会となりました。

笑顔がかわいいヴィカ、留学直前に結婚したそうです。おめでとう！（きっと）ちょっとがっかりした西山先生!?!（写真は表紙）日本研修の良い思い出になれば幸いです。

（食品栄養科学部栄養学科2年 加治いずみ）



## 草薙神社とヤマトタケル

県立大学の東南に『草薙神社』がある。看板によれば、景行天皇五十三年としているが、まだ文字による記録のない時代だから伝承として伝わってきたのである。しかし、ヤマトタケルの伝説は『古事記』、『日本書紀』に出ているところに多く、それは主として東海道一帯である。

よく知られているように、『さねさしサガミの小野』で、ミコトは『賊』に騙されて火をつけられたが、逆に草を剣でなぎ払い、火を向こうにむけ、難を逃れたとされている。

問題は、この『サガミ』だ。今は神奈川県と思われているが、往古はするがの国も『サガム、サガミ』としていたときがあり、このあたりで誤解がある。ちなみに箱根の山の東（現神奈川県西部）は、『師長国（しながのくに）』といわれていた。古代の地名と現在のそれとは違うことがあるのだ。

## 『神社は自然保全の拠点』

この『サガミの小野』だが、古事記には『大きな沼があり』としている。これは今の焼津・藤枝を含む『志太平洋野』であり、万葉時代にも『志太の浦』と呼ばれ、海や湖沼があったのである。そして、現在も天然ガスが噴出しており、東海ガスはこれを探っている。いわば、天然ガスの自噴したものが、自然発火することがあったと思われ、それが記録に残ったのである。現に焼津には『焼津神社』があり、

## 谷田風土記

社前を古い東海道が通っている。では、『草薙神社』はなにかと言えば、征伐された現地豪族ゆかりの地であったろう。『古事記』では『その国の国造』としている。大和朝廷以前の先住氏族と言える。岡部町にも先住の『三輪神社』があり、古い歴史を伝えている。

## 『県立大学とは深い関係』

草薙神社はまた水源保護の目的を持っており、森がその役目を果たしている。『秋の竜勢花火』も雨乞いの行事である。県立大学の弓道部は、ここの道場を利用していただいております。開学以来何かとお世話になっている社である。時間があれば散策を勧めたいところだ。門前の道路がミコトゆかりの『日本平』に通じる道にもなっている。

（国際関係学部教授 高木 桂蔵）



草薙神社を案内する案内板

81

## アリゾナ大学薬学部教員による特別講義を開催

平成16年3月4日（看護学部棟4階講義室）に、米国アリゾナ大学薬学部助教授 Edward Armstrong, Pharm.D.により、EPrinciples of Health Outcomes and Pharmacoeconomic ResearchE（保健医療の成果と薬経済学的調査研究の原則）と題して特別講義が開催され（薬学部臨床薬剤学講座の中野真汎教授の紹介）医療薬学系大学院生、教員、約30名が聴講した。

